

岡崎市美術博物館ニュース〈アルカディア〉

97
WINTER
2024

ARCADIA

OKAZAKI CITY MUSEUM NEWS



EXHIBITION

レアリズムの視線

— 戦後具象美術と抽象美術

田中 裕紀乃

会期 令和6年1月27日(土)～3月17日(日)



アルベルト・ジャコメッティ《鼻》
1947年 大阪中之島美術館蔵

レアリズムという言葉・概念について
本展のタイトルにある、「レアリズム」とはなに
か？

美術用語としての「(仏)realisme」あるいは「(英)realism」という言葉は、日本語ではしばしば「写実主義」と訳されてきました。「写実主義」とは、物事を理想化せずありのままに再現、模倣する諸芸術の方法を意味します。しかし、諸芸術における「レアリズム／リアリズム」に与えられてきた意味

を概観すると、この言葉は、「現実主義」や、哲学用語の「实在論」とも関連のある語であり、「写実主義」という言葉だけでは捉えることのできないより広義な言葉であるということがわかります。そしてその意味は時代と共に変容してきました。そのため今日では、「写実主義」という訳語よりも「レアリズム／リアリズム」という表記が好まれるようになってきました。「レアリズム／リアリズム」とは単に美術の形式的表現を指しているのではなく、現実を追求する作家の制作態度、つまり内側の芸術性を追求していくものです。現実とは、芸術家によって咀嚼され、変換され、作品になります。

本展では仏語の「レアリズム」を強調しています。それは、本展に出品される作家のうち、フランスに縁のある作家が多いというのがありますが、英語に比べ馴染みが少ない仏語を用いることで、「リアリズム」という言葉にまつわる固定概念を超え、写実だけに囚われない「レアリズム」の持つ意味の広がり、より深い作品解釈につなげることを目指したからです。

本展では、一見レアリズムの枠外に置かれる抽象美術と、抽象美術の対として扱われる具象美術の関係を解きほぐし、ふたつが共に「現実」から出発しているという視点から再構築を試みるものです。「レアリズム」というフィルターを通して両者を鑑賞すると、そこにはどのような違いや共通点があるのでしょうか。「レアリズム」という多義的な概念をキーワードに、様々な「現実」の表現を概観していきます。

第1章 具象美術の台頭 時代の証人者たち

ここでは、主にフランスを舞台に活躍した具象美術を代表する芸術家をご紹介します。特に、日本ではこれまでほとんど言及されてこなかった、ベルナル・ピュフェヤアンドレ・ミノーらが参加した、「オム・テモワン（時代の証人者）」というグループ、



そしてほぼ同時期に企画された「時代の証人画家展」という、ピカソや藤田嗣治らが参加した展覧会に焦点を当て、現実をどのように作品として表現したのか、という視点で紹介していきます。2つの大戦が芸術家たちに与えた影響は計り知れませんが、「具象」という枠組みで現実を捉えた画家たちの作品にフォーカスを当てます。

第2章 アンフォルメル美術

ここでは、ピエール・スーラージュ、サム・フランシス、アンフォルメル美術の主唱者であるミッシェル・タピエとも交流のあった「具体美術協会」を取り上げ、現実を「抽象」という枠組みで、「現実」をどのように捉えていったのかを考えます。時代と呼応しながら変革した美術のスタイルの変遷を辿ります。

第3章 シュルレアリスム運動

当館のコレクションを中心に、シュルレアリスムの美術を紹介します。シュルレアリスム運動は、モ



元永定正《作品2》1959年 兵庫県立美術館蔵



堂本尚郎《絵画》1957年 岡崎市美術博物館蔵

ダニズムの発展に欠かせない芸術運動であり、その後の抽象表現主義やアンフォルメルにも少なからず影響を与えたとと言えるでしょう。本章では、当館のコレクションの中でも随一の作品をご紹介します。まず、シュルレアリスムの画家たちは、どのように「現実」を捉えていたのでしょうか。

第4章 日本の様相

最後は、欧米の美術運動の流れに呼応して、独自に発展してきた日本の様相を概観していきます。現実社会を風刺した北川民次、一九五〇年代の激動する戦後社会において、若い画家たちの新しいリアリズム運動が高揚するとともに、「アンフォルメル旋風」に代表される戦後のアメリカやヨーロッパで展

開される現代美術の動向が紹介される逆風の中で、新しい時代の日本画を求めたグループである「匹亜会」。「具体美術協会」のメンバーとして活躍した元永定正の作品の中でも、「アンフォルメル風」と言われたスタイルを乗り越え、シンプルでありながら力強い画面に到達した作品をご紹介します。「現実」から出発した戦後具象・抽象美術を考えるにあたって日本ではどのような展開があったのかその一例を見ていきます。

戦争を経験し、あるいは復興に向かう激動の時代を生きた芸術家たちによって描かれた、様々な「現実」を是非当館でお楽しみください。

EVENT INFORMATION

講演会 要事前申込

「1950年代の美術

——線描絵画とアンフォルメルを中心に」

講師：尾崎信一郎氏
(鳥取県立美術館整備局 美術振興監)

日時：2月18日(日) 14:00~15:30

定員：50人

※1度の申込は2人まで。申込者以外の参加不可。

応募多数の場合は抽選。

場所：当館1回セミナールーム

参加費：無料

トークサロン@ YOUR TABLE 要事前申込

展覧会や作品について担当学芸員と気軽にお話しませんか？

日時：2月22日(木) 15:30~16:30

定員：10人

※1度の申込は2人まで。申込者以外の参加不可。応募多数の場合は抽選。

場所：館内レストランYOUR TABLE

参加費：1人2,000円(ドリンク+ケーキ付)

ギャラリートーク

日時：2月12日(月・祝)、3月9日(土)

各日とも14:00~15:00

場所：当館1階展示室 (開始時刻までに展示室入口前にお集まりください。)

参加費：無料 ※ただし、当日の観覧チケットが必要です。

申込方法—イベントすべて共通

◇あいち電子申請(ネット申込)は当館HPから

◇はがきでの申込

はがき裏面に①参加を希望するイベント名②参加者全員の郵便番号・住所・氏名・年齢(学年)・電話番号を明記の上、お申込みください。

※はがき1枚につき申込は1件まで。1度の申込は2人まで。

申込締切
申 込 先

講演会・トークサロン共に2月2日(金)まで
〒444-0002 岡崎市高隆寺町峠1

岡崎中央総合公園内

岡崎市美術博物館「リアリズム展」イベント係

春、柳を憶う

特任館長 榊原 悟

柳と云えば、「むかし恋しい銀座の柳」か、「土手の柳は風まかせ」の柳か。いや、ちよつと訳知りならば、吉原大門の「見返り柳」を挙げるだろう。「青柳の糸」との美しい言葉もあるではないか。すつかり日本の社会と風土に溶け込んだ柳だが、そもそもは大陸から渡来した、いわゆる帰化植物だと云うことを御存知の方がどれほどいるだろうか。それが、

捨てやらで柳さしけり雨のひま 蕪村

と吟じられるような栽培の容易さから、いつかに植栽されるようになった。時代は遡るが、『万葉集』巻十九にこんな歌が載る。

二日、柳黨を攀ぢて京師を思ひし歌 一首
春の日に張れる柳を取り持ちて
見れば都の大踏し思ほゆ

大伴家持（七七八五）が越中守であった天平勝宝二年（七五〇）の三月二日、赴任先で都を偲んで詠んだ歌である。これによれば唐の長安に倣った平城京の朱雀大路には、街路樹として柳が植えられていたらしい。しかも柳はどうやら早くも越中国でも植栽されていたようで、家持は、その枝葉を手に取り都を思ったと云うのである。柳黨すなわち柳葉の眉は、桃色の頬と共に美人を言うのだからこの歌の背景に美人の存在を認めるのも無理からぬところ。そう云えば、これを詠んだ前日〓三月一日に家持は、

春の苑 紅にほふ桃花
下照る道に出で立つをとめ

と、あたかも白昼夢であるかのような情景を詠む。そこで見た美しい桃の精こそがその柳黨の乙女ではないか。気になるところである。

それはともかく家持は、柳が渡来した植物か否か承知していたのだろうか。いや、そもそも家持に、現代のわたしたちのように渡来か、そうでないか、そんなことを問題にすることを求めることが無理と云うもの。とは云え、家持には、都の中央を走る朱雀大路に街路樹を生やすこと、及びその植栽樹が柳であることが、唐の長安のそれ、すなわち唐の判に準じたものだ、との認識があったのは間違い

ない。となれば、家持の眼には京洛の柳の向こうに、さらに遠い長安のそれが見えていたのかも知れない。

その柳、さらにこの後、京の都でも、「新京朱雀のしだり柳」とか「大路の沿ひてのぼれる青柳の花」とか、『催馬楽』が謳ったように京の都の朱雀大路に植えられて、大いに愛でられたようので、次の名歌が遺る。

見渡せば柳桜をこきまぜて
宮こそ春の錦なりけり 『古今和歌集』巻第一

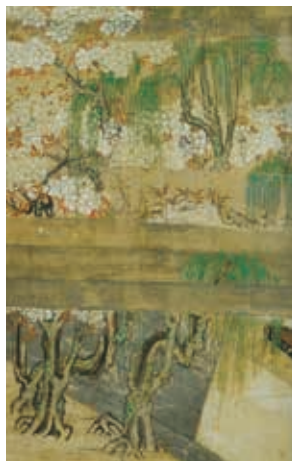
前書には「花ざかりに京を見やりてよめる」とある。索性（生没年未詳）のこの歌が単なる修辭ではない程に柳が、朱雀大路はじめ其処此処に植えられていたのだろう。貴族の邸の鞠場には鞠の懸り木として松、桜、楓と共に柳が植栽されていたはずだ。それに伴ない、柳の唐めき風も急速に忘れられたに違いない。

その「緑柳紅桜」（菅原道真著『菅家文章』巻第四「野庄」）の織り成す錦の美しさ、それこそが都の春であった。さしずめ制作年代こそ鎌倉時代にまで下るものの、「住吉物語絵巻」（静嘉堂文庫美術館蔵）上巻で継子いじめの舞台となった中納言邸の檜皮葺の門脇に生える、見事な桜と柳の巨樹などが、そうした都における植栽事情を物語る。爛漫と咲く桜（二重咲きと八重咲きとを描き分ける）、柳の緑と相俟って都の錦はかくやと云わんばかりだ。緑青に白緑を点じた柳葉も美しい。王朝人の柳を見つめる眼の確かさが分かるかと云うものだが、もう一首、柳を詠んだ名歌を上げておく。索性の父遍昭（八一六〓八九〇）の詠である。

西大寺の辺の柳をよめる
浅緑いとよりかけて

白露を珠にもぬける柳かな 『古今和歌集』巻第一

青柳の糸に留まる白露を珠と見た―柳を見る眼と、その美しさを歌う修辭法は、既に充分な成熟の域に達していた。



『住吉物語絵巻』
静嘉堂文庫美術館蔵

「学芸員」として働くという事

安本 翔音

「学芸員」とは何か。一年目の新人ではあるが、入ったばかりだからこそ、「学芸員」という仕事について歴史系の学芸員の視点から考えてみたいと思う。

まず、一般的な学芸員のイメージについて考えてみよう。よく言われるのが「展示室に立っている人」であろうか。私も小さい頃はそう思っていたが、実際には、資料調査や収蔵庫に入る時、展示準備をする時、以外はほとんど「事務室に座っている人」である。また、好きなことばかりできるなんて思われている方もいるかもしれない。これは、強ち否定できないこともないが、実際には、自分の専門外の知識を求められる事も多く、一般的な事務作業も多い（一日の多くはこの事務作業に追われている）。私は学生の頃は、「中世村落」を研究していたが、およそ六〇〇年前の村のことを知っていても、今のところはまだ、その知識を活かす場面はあまりない。

—「過去」から「未来」へ—

では、学芸員は何のために働き、何をしているのか。文化庁のサイトを見ると、「博物館とは、資料を集めて保管し、調査研究して資料の価値を調べ、その成果を展示やいろいろな方法で発信し、すべての人々に学びや楽しみを提供する機関」⁽¹⁾であるとしている。これを簡単に格好つけてまとめれば、学芸員の仕事は「過去」を「未来」につなぐ⁽²⁾ことであると考えられる。先代がこれまで、数十年、

数百年かけて繋いできた「モノ」を後世に伝えていくのが、今の私たちの役務である。これまで繋がれてきた資料はたくさんの方の思いが詰まったものであるが、残念ながら、その「思い」自体をそのまま受け継いでいくことはできない。だからこそ、その対象であった「モノ」こそは大切に、敬意を持って接するべきなのである。資料を前にすれば、資料こそが一番偉い存在であり、私たち学芸員は、敬意を持って接しなければいけない。私が入ったばかりの頃、「自分の身体よりも資料の安全を優先しろ」なんて言われたこともあった（あれ、これってもしかしてパワハラ？）。反時代的な表現ではあるが、私はこの言葉に胸を打たれた。資料を前にすれば、どんなに偉い学芸員や研究者でも同じなのだ。展示が一番重要な仕事だと思われがちであるが、実は一番根本で学芸員が大切にしていることは、資料を継承・保存していくことである。

資料にとって安全かつ快適な場所にずっと保管しておけば、資料の劣化を招く可能性は極めて低くなる。しかし、誰の眼にも触れず、ただ博物館の奥底に資料を閉じ込めておくことは、本当に資料の継承といえるのか。そこで次に、資料の公開について考えていきたい。

—「今」という時—

資料の劣化を招きうる機会を作り出してしまう展覽会は何のためにやるのか。文化庁の記載を少し堅く言えば、教養の共有及び、学習の場の提供のため

であろうか。私は、「今」が無ければ、「未来」は存在しえないと考えている（少し自分でも何を言っているかよくわからなくなってきたが、もう少しお付き合いいただきたい）。現在において広く様々な人にふれられて、認知されているからこそ、未来においても、それは「宝」として輝くのであろう。だからこそ、私たち学芸員は、広く正しい知見を示すために、日々の研究に努めなければならない。過去から未来につながる現在には通過点に過ぎない。しかし、その通過点がなければ未来はない。歴史を振り返る仕事をしている我々ではあるが、実は視点は未来を捉え、そしてそこに向かう今という時こそを大切にしているのである。

以上、普段、美術館や博物館の裏にいる学芸員がどのような心持ちで何をやっているのか、少しでも垣間見てもらえたのなら幸いです。冒頭でも述べたが、この世界に片足を踏み入れたばかりの私が、「学芸員」のすべてをわかるはずがない。ましてや、十年やってやっと一人前といえる世界である。「若造がなんか言っとるわ」程度にみていただきたい。

さて、学芸員人生をリタイアするころ、私はこの文章をどのような思いで読み、その先を見据えるのだろうか。

(1) 文化庁博物館総合サイト <http://museum.bunka.go.jp/museum/>
(令和五年十二月十九日最終閲覧)

新収蔵品紹介

国島征二《FUKURO》一九七三年

今泉 岳大



Masayoshi Suzuki Gallery で2023年2月に開催された「国島征二／秘密の内包」での展示風景

当館では今年度国島征二《FUKURO》二点を新たな収蔵品として加えることになった。当館では同作家の「Wrapped Memory」シリーズ三〇点、アルミの積層《A・C―7A 08―5》、本作と同形であるアルミの《FUKURO 73―1》に加え、絵画二点を所蔵している。

国島征二は一九三七年に名古屋市中生まれ、七〇年代からアメリカを拠点に活動し、日本とアメリカを中心に世界各地で作品を発表してきた。一九九四年から岡崎市夏山町に居を構えて制作活動を行

い、昨年二〇二二年に惜しまれながら亡くなった。石彫によるパブリックアートは広く知られており、ロサンゼルス国際空港に設置された《Stacking Stone》（一九八三）をはじめ、愛知県内では東山公園前の《緑と風のフレーム》（一九八七）など各地に多くの作品が残されている。また、「もの派」がクローズアップされた七〇年の「今日の作家展」（横浜市市民ギャラリー）に選出されたことは彼の経歴を見る上で重要である。

国島が《FUKURO》を最初に発表したのは一九七二年の桜画廊での個展である。本作は人ひとりがちよどすつぽりと入るほどの大きさの紙袋の形態をした立体作品である。表面はコールドタールを塗ったように鈍く光り、中は表面と同様に黒い固形物で満たされている。これは国島が画廊で最初に発表した本格的な立体作品であった。パブリックに設置された大型の石彫や、アルミニウム合金による積層シリーズなど、彫刻家としてのイメージが強い国島であるが、国島が本格的に立体作品を展開したのは、この《FUKURO》以降のことであり、それ以前に発表していたのは絵画が中心であった。

《FUKURO》は国島が僅か二年ほど取り組んだシリーズである。一九七二年の桜画廊と、翌年のギャ

ラリー16（京都）の個展にて合計二回発表した。本作は黒く塗られた大きな紙袋（小麦粉などの輸入に使用された袋か）の中に、水膨張性のウレタン樹脂が詰められている。制作した当時、国島とそれを手伝った妻の一美は、水を加えて膨張する袋の中のウレタン樹脂材をふたりで押さえながらかたちを成型したという。桜画廊での展覧会では、紙袋の形態のいくつかのバリエーションの立体クスクリーンが数種類展示された。紙袋をモチーフにした作品はこの二つの展覧会のみであり、以降登場しない。

国島作品における《FUKURO》、あるいは紙袋という形態は何であったか。国島は名古屋港区の中川運河の河口付近で育った。六〇年代から高度経済成長に伴う公害問題で川の汚染が急速に進み、当時の中川運河は黒い水が流れる川であったという。国島の制作を間近で見てきた桜画廊のオーナーの藤田八栄子は国島の作品に対して「国島征二は名古屋の港ちかく中川運河辺りの風景をベースに作品をつくっていると思う」と考察していた。とすると、《FUKURO》は中川運河の黒い水を紙袋に掬い取って展示室に置いたイメージである、とひとつの解釈ができる。本作は環境問題の風刺という性格を持つと同時に、国島自身

の原風景である記憶を容器に満たしたものであると考えることができる。川の水は黒い故に、川底や水中にあるものは見えない。つまり、汚染された水の黒さによって中にあるものが隠されている。《FUKURO》もまた中身に詰められたウレタン樹脂によって中身が隠されており、本作は中にあるものを袋として包み、黒いことでそれを隠しているという作品であると見ることが出来る。

国島は《FUKURO》のあと、いくつかの試験的な作品を経て、石を内包したアルミニウム合金による立体作品、いわゆる《アルミの積層シリーズ》に移行したが、これらの作品の基本構造である「ものを内包する」、あるいは「隠す」という方法はこの《FUKURO》から始められたと言えるだろう。その後、国島がロサンゼルスを拠点に制作・発表したアルミや石彫のシリーズは「包む」と「隠す」という方法を「内」と「外」という対比関係に交換し、これに「人間」と「自然」、「人工物」と「自然物」という題材を代入して展開していったと考えられる。

《FUKURO》は国島作品に通底する核心のようなものをシンプルかつ濃密に秘めている。多くを語らなかつた国島の制作の意図や、美術家としての国島の本質は作品に「内包」されている。

やさしいミュージアム講座
「屏風のはなし」

酒井 明日香

旧額田郡公会堂
楕形ペディメントのレリーフ

伊藤 久美子

コロナ禍と工事休館を経て、令和五年度は久しぶりに「やさしいミュージアム講座」が本格的に復活しました。本講座は博物系・美術系それぞれでテーマを設けて開催する連続講座で、美術の今年度のテーマは「屏風のはなし」。屏風研究の第一人者である、榊原特任館長による講座です。

今年度開講した全三回は、屏風の基礎知識、日本に屏風がもたらされた話、正倉院宝物にみる屏風についての話でした。各回とも特任館長の膨大な知識に裏付けされた面白い語り口で、「そうなんだ!」とみなさんが楽しんでいらつしやる様子が印象的でした。

まず第一回目は、屏風の用途や各部分の名称の説明に続き、折り曲げて使うことを意識した絵画の構図をスライドで実感。その後二回目・三回目は、屏風がいつ日本にやってきたのか、いつから日本国内で制作されるようになったのかを資料の記述から読み解き、多くの屏風が奉納された正倉院宝物を題材に、当時の屏風がどんな材料で作られ、何が描かれていたのかを紹介。特に、初期の屏風で採用されていた、屏風を折り曲げるための構造が、接扇(ちゆうせん)という(絹)によるものであったことと、正倉院宝物の屏風に表現されていたモチーフが、唐風やペルシャ風であったことは、今日私たちが思い浮かべる屏風とはかなり異なります。その後屏風は、接扇が紙の蝶番に改良され、

描かれる主題が唐風から日本風に変化してきます。

そして大陸からもたらされた屏風は、日本で様々に使用されるようになりま

す。この続きとなる講座は、来年度に開催予定です。準備が整い次第、当館ホームページや市政だより等でご案内いたします。今回ご参加いただいた方も初めての方も、みなさまのご参加をお待ちしております!



旧額田郡公会堂(朝日町)は大正二年(一九一三)一二月に竣工し、今年で築一一年となる。大正五年の市制施行後、岡崎市公会堂から岡崎市郷土館としての役割を終え、平成二二年(二〇一〇)四月に閉所となった。幾度も取り壊しの話もあったが、平成一一年に南側に建つ旧額田郡物産陳列所と共に国の重要文化財に指定され保存措置が執られることになった。

木造平屋建、ルネサンス様式を基調とした公会堂は、岡崎一のモダンな西洋館であったと言われ、漆喰彫刻によるレリーフ(浮彫り)が屋内外の随所にみられ、この建物の見所の一つとなっている。外観北面の中央玄関は洒落たポーチになっており、上部に半円状の楕形ペディメントと飾手摺を配してバルコニー風に仕立ててある。

この楕形ペディメントのレリーフの意匠はメダイオンと植物で、「中央にメダイオン、両脇に外側へ伸びる植物」が配されている。メダイオンとは仏語でメダルのこと、建築においては円形や楕円形の枠で縁どられた装飾を指す。本来、西洋の建築装飾であったメダイオンの中には西洋の絵画、例えばキリスト教等を題材にしたものが描かれているが、日本では当初は様式だけは真似て、モチーフを抽象化もしくは空白のメダイオンとし、一般に受け入れられやすい形にして採用したようである。

全国各地にある明治中期から昭和初期に建てられた洋風建築には、円形・楕円形・逆卵形のメダイオンを中央に置き、両脇に外側へ伸びる植物を添えるというデザインがよく用いられて、多様な形をとっている。旧額田郡公会堂に類似するレリーフとしては、旧東京音楽学校奏楽堂、旧岩崎邸、旧内閣文庫(いずれも東京、旧内閣文庫は愛知県明治村に移築)等が挙げられる。

閉じられ無人となって十年余、建物の劣化は否めず、外壁の状況等は実に痛々しい。公共施設の耐震化対策とあわせ、重要文化財としての保存整備がなされることを令和の時代に待つ現況である。

【参考文献】
寺沢浩「北海道大学医学部旧本館のモデルとレリーフについて」『北区』第一〇号 二〇一〇年 北海道歴史学研究会

SHOP INFORMATION



1000年以上の歴史と伝統をもつやきもの街、瀬戸市から生まれた暮らしに溶け込むシンプルな招き猫「SETOMANEKI」。江戸時代に江戸の町人文化から誕生したと言われる、日本独自の縁起物である招き猫。従来は祝いの品として店先やお玄関に飾られることが多く、「日本の文化である招き猫を、もっと身近に感じてほしい」という思いのもと、インテリアとしての招き猫を目指し、これまでの印象をがらりと変えデザインされました。瀬戸の地で取れる良質な陶土と、石膏型の技術が詰まった瀬戸焼ならではの色と表情。手仕事の温かみ、やきものの凜とした佇まいを持っています。「人を招く」という招き猫の本質を見つめ直し、たどり着いたシンプルなデザインのSETOMANEKIは、和の空間のみならず、北欧やナチュラルといった様々なインテリアに溶け込み、日々の暮らしに彩りを添え、幸せを招く存在となるよう作り手の思いが込められています。

営業時間 10:00 - 17:00
定休日 月曜日(祝日の場合は営業。翌火曜日が振替定休日となります)
TEL 0564-83-5952 FAX 0564-83-5953
MAIL yagura@b-soup.com
HP <https://www.facebook.com/museumshop.yagura>



YOUR TABLE

岡崎市美術館併設のカフェレストラン『YOUR TABLE』。ガラス張りの店内には太陽の光がいっぱい入り、お洒落で開放的な空間が広がります。ランチ時には景色を愉しみながらお食事を楽しむことができます。カフェタイムにはケーキセットや軽食などを販売中。

営業時間 11:00~21:30 土日祝 10:00~21:30
定休日 月曜日(祝日の場合は営業。翌火曜日が振替定休日となります)
LUNCH 11:00 - 14:30 (L.O.14:00) TEA 14:30 - 17:00 (L.O.16:00)
DINNER 18:00 - 21:30 (L.O.20:30)
TEL 0564-28-0141 HP <https://your-table.owst.jp>

サウナブームと中世の「風呂」

近年、サウナブームが特に若者の間で巻き起こっている。皆さんもご存知のとおり、サウナ自体の発祥はフィンランドであるとされている。しかし、日本においてもサウナとは少し異なるが蒸し風呂(サウナに比して低温多湿)というものが古くから存在する。今では「風呂」といえば湯船に浸かる入浴のことであるが、実は江戸時代初めまでは「風呂」といえば一般的には蒸し風呂のことを指した。昨年の大河ドラマ「どうする家康」においても、家康が蒸し風呂に入るシーンが放映された(第十九回「お手付きしてどうする」)。また、南北朝期から室町初期の皇族であった貞成親王が著した日記である「看聞日記」においても「風呂」(蒸し風呂)に入る記事がよくみられる。そして、湯船に浸かることを「沐浴」・「沐浴」と記しており、現在の風呂と江戸初期以前の「風呂」はやはり異なるものであった。

そこで、「風呂」について辞典を引いてみれば、風呂の語源は室から転じたものであるとされている。「室」という字からも何か囲まれた空間という認識はしやすいであろう。本来は蒸気を囲う室であった「風呂」は、江戸時代になると浴槽の浅い「戸棚風呂」や首まで湯に浸かる「すえ風呂」といった様々な形式のものが生まれていった。そして、いつしか蒸し風呂は廃れ、現在の形式のものを「風呂」と呼ぶようになっていたのである。

このように同じ言葉でも、指すものは今と昔では異なることが多く、言葉の変遷を探るのもまた、過去を蒸し返して調べる歴史の面白みといえる。(安)

表紙画像：白髪一雄〈無題〉1959年 豊田市美術館蔵



開館時間 午前10時～午後5時
※最終の入場は閉館時間の30分前まで

休館日 月曜日(祝日に該当する場合は、その翌日以後休日でない日)
年末年始 ※展示替えのため臨時休館する事があります。

HP <https://www.city.okazaki.lg.jp/museum>

ARCADIA OKAZAKI CITY MUSEUM NEWS

【岡崎市美術館ニュース/アルカディア】 第97号 2024年1月発行
編集・発行 岡崎市美術館
〒444-0002 愛知県岡崎市高隆寺町1番地 岡崎中央総合公園内
TEL 0564-28-5000(代表)